



写真は生前の川内龍さん
友人の堤信一さん提供

堤信一さん提供

私の被爆体験

川内 龍

千葉県千葉市中央区仁戸名町
まれ

長崎県出身 大正 12 年 4 月 1 日生

平成 15 年 80 歳で逝去

今回あの日のことを書くまでにはずいぶん心の整理に時間がかかりました。人間として生きる事も、人間として死ぬことも許されなかった多くの人たちの為に、

被爆者の一人として書き残さなければならない事の大切さ、責任をしみじみとっております。十分に表現できないもどかしさも残りますが、事実はこちら以上でありましたことをお察しいただきますように。

今まで書いた事も無い、話したことも無い、又表現の下手な自分で果たして納得のゆく文が書けるのか自信がありません。書き始めると色々な事が思い出され、何から書いたらいいのか正直なところ判らなく、頭の中はパニック状態で理解に苦しむ点多々あると思います。その点、よろしく願いいたします。

大正 12 年 4 月 1 日 長崎県北松浦郡鹿町村 日鉄鉱業（株）北松鉱業所

社宅にて出生。昭和4年、北松浦郡鹿町村歌浦尋常高等小学校に入学。小学校時代、父よりお前は人一倍大きくて、母は出産するのに大変苦しんだと聞いた。出産後、体重を計ったら4kgあったとの事。母はお前のここまでするには大変苦労したのだから、大きくなったら親孝行するのだぞと何時も言われていた。小学校時代はよく、イタズラにケンカもした。先生にお前はイタズラとケンカをしにきているのか、学校は勉強する所だ何時も言われていた。イタズラをする度にバケツに水を満杯にして両手に下げさせられていた。いまだに忘れる事。が出来ない

昭和12年、大分県立津久見工業学校に入学する。工業学校3年間は自分にとって一番楽しい青春時代であった。戦時中でもまだのんきなものだった。衣食住に困ることも無く、楽しい毎日を送った。1カ月の下宿代が3食付きで5円、学校の授業料が3円、毎月30円送金してもらっていたので小遣いに不自由する事も無かった。良しにつけ悪しきにつけ、色々な事を覚えた。先ず、酒、煙草、映画館。当時の食堂、今のレストランに出入りする事2、3回。食堂に行き煙草を吸いながら食事をしていたら、風紀係の職員に見つかり、翌日校長室に呼び出されて1週間の停学を命ぜられた。停学中、下宿屋に1人居るのも悪いので遊びに行き、皆が帰る時に一緒に帰るようにしていた。

或る日、大分に遊びに行き津久見駅に帰り着き下車した。改札を出て階段を降りようとしたら、運悪く風紀係の職員に見つかり早速校長室に呼び出されて言われた。「お前は解っていてやるのだからどうしようもない。明日から1ヶ月校長室にて授業を受けながら、休み時間15分間と昼休み1時間、放課後1時間正座する事。」この時の1ヶ月間の永い事。1ヶ月間無事に終わり、反省文を書き解除になった。その後、校長より「お前は、成績は非常に良く将来見込みがあると信じた退学にはしない。今回の事を反省し、2度と同じ失敗をしない事。」と言われた。それでも人のやらない事を一番先にやるのが面白くて、授業中に本を前に立てて、下を向いて1時間目から弁当を食べていた。「1番後ろの大きい、下を向いて何をやっている！前を向いて先生の講義を受ける事！」とよく言われた。

授業中「これが解る人は手を挙げて。」と先生が言う。みんなの手が挙がる時に、自分だけ手を上げないでいると「お前、こんな事が解らないのか。駄目だぞ。」そんな問題が解らないはずがないでしょう。僕は皆が手を挙げる時は上げません。皆が解らなくて、誰も手を挙げていない時に上げるのが好きです。物理の授業の時「これが解る人は手を挙げて。」と言われ、誰も手を挙げていないのでハイハイと大きな声で手を上げ、「ハイ、答えはその場合何々の物質の作用によりこうなります。」と答えたら「正解 その通り！」と先生が言った時の嬉しかった事。皆の前で頭を人差し指で二度叩いて自慢した。そしてその後直ぐ「小男総身の知恵はしれたもの！」と言ったら何だお前は何時も一言多いと叱られた。三年間色々あった。嬉しい事、楽しかった事、悲しかった事、それでも多くの友を得る事が出来た。今でも月に1回は必ず電話して健康を確認しあっている。

昭和15年熊本工業高等学校に入学。高工入学で一番喜んでくれたのは母。涙を流して喜び、良く頑張ったと言って金側の腕時計を買ってくれた。入学式には、母と隣のお婆さん2人が来た。母は、「これからはイタズラを止めて勉強、勉強。」とただそれだけ言った。隣のお婆さんは素直になりなさいと言った。

入学式も無事終わり、寮の部屋も決定。8畳間に2人ゆっくり落ち着く事が出来た。一か月もすると皆すっかり高工生らしくなってきた。5月初めに熊本高工永年の伝統新入生の歓迎会が開かれた。寮の中庭に一晩中、煌々と焚火を炊き、暗くなると上級生が10人程素裸になり、スクラムを組んで踊りながら中庭を一周し、新入生を一人一人胴上げして歓迎。これが終わると上級生が新入生は素裸にされ、新旧入り乱れ焚き火を囲み、夜遅く迄踊りまくり、焚き火が消火する頃になると新入生は一人二人と部屋に帰り寝ようとする。しかし後片付けが終わった上級生が帰って、部屋に来て騒ぎだし夜が明ける。日曜日なので別に構わないが我輩は半分眠っている。午後は龍田山に登り、山頂にてスクラムを組んで校歌寮歌を歌い、山を降りて一日が終わった。

数日後、5月9日午後母危篤の電報を受ける。下駄を履き飛んで帰るも自

宅に着いた時はもう、亡くなっていた。母亡き後は学校に帰っても、悲しさと淋しさを講義も、うわの空で一時は学校を辞めて就職をしようと思った時もあった。

15日位過ぎて、隣のお婆さんが、日曜日にヒョコリ来た。びっくりした。「何事かあったか？」と尋ねると、「何もない！ただ龍ちゃんがどうして居るか心配になったので来た」と言って、「熊本まで来たので水前寺に熊本城でも見学してかえるか！」と言って、二晩旅館に泊まった。帰る前夜、「退学だけはしてはならない！

退学すると、言ったら怒るからね。苦労してやっと入学したのだから、たった3年間の辛抱だ！男だろう、これからは全て母となって面倒みる！何でも言ってきなさい。」2年半辛い事もあった。辛抱した。昭和17年9月繰り上げ卒業、昭和18年4月三菱製鋼長崎製鋼所に就職した時お婆さんが誰よりも一番喜んで呉れた。

冗談で「是から龍ちゃんにうんと楽しませて貰います。」と涙を流して喜んでいた。就職後は良き上司、良き先輩に恵まれ、あの日8月9日11時12分を約2年半近く色々な事があった。ある時は仕事に行き詰まり、それを如何に解決するか夜遅く迄一人事務所の机に向かい図面を引いていた時もあった。又、赤紙一枚で召され最終列車で出征して行く人を日の丸の小旗がちぎれる迄、寒い長崎駅頭に見送った日もあった。友と別れる淋しい日が多かった。行ったまま帰らぬ人も多い。2年半の内、楽しい思い出より淋しい思い出が多い。あつと言う間に過ぎ、あの日を迎えた。

あの日、8月9日も暑い、暑い日であった。静かに目を閉じると、あの日
の恐怖苦しみ、悲しみ、想像を絶する地獄のような惨状がまざまざと脳裏に蘇えり万感胸に迫り胸が痛くなってきます。今まで私は、被爆体験を他人に語った事はありませんでした。あの悲惨な有様をどんなに説明しても分かってもらえないもどかしさと思い出す事の辛さ、何時も話題をそらしておりました。実は今回も話したくありませんでした。ひたすら忘れようとしてきました。そうでなければ生きてこられなかったのです。あれほどの惨い（ムゴイ）死に方をして、あの地獄の中で見離され、見捨てられた人達の事を思う

と、生きている事が今でも申し訳ないのです。あれは、人間の世界の出来事ではありません。あんな恐ろしい事がなぜ私達の上に行ったかは今でも納得出来ないのです。投下決定をした人は、あの恐ろしい結果を知っていたのでしょうか。

8月9日も暑い日でした。私は工場巡回中、眼も眩む程、鋭い光が目差し込んだ。「あっ！」と声を上げ地に伏したきり、12日朝まで意識不明、何も解りません。12日、朝目が覚め周囲を見ると足の踏み場もないような本館事務所の部屋に10人程唸りながら横たえられている。髪の毛は、、焼けただれ皮膚がペロリと下がり、目が見えないとはい回っている人、鼻の形も耳の形もない様に黒焦げて痛がる人、身に着けている物、焼けて背中にベトトリとくっついている人、手も足も皮膚がめくれて垂れ下がっている人

[水！水！水！を下さい]と、うめく様に言っている人、自分ではどうする事も出来ず茫然と座り込み、工場巡回中の自分が何で想像も出来ない姿で、こんな所に居るのかどう考えても全然思い出す事が出来ない。思い出されるのは、巡回中、あの一瞬の閃光だけ、色々と考えている内に思い出されたのが自分にとって一番大切な人の兄さん 鑄造課技師の事本館事務所を飛び出し50m程離れた鑄造課の事務所に向かって玄関を出たところ玄関前広場に死体を山ほど積み重ね石油をぶっかけ焼いていた光景を見た瞬間口では言えない悲しさが込み上げ、ただ茫然と立ちすくみ両手を合わせていた。その時、何気なく下を向いたら裸足である。裸足ではどうする事も出来ない。本館事務所に戻り足につける物を探すも何一つない。横に倒れている人を見ると地下足袋を履いていた、死んでいるのか、生きているのか判らないが、地下足袋を脱がせようとしたら皮膚がベトトリ足袋に付いてきた。それでも、それを履いて玄関を飛び出し鑄造課事務所に行った。事務所は瓦礫の山と化していた。それでも懸命に探すも人らしき姿、見当たらず無念両手を合わせ探すのを断念し、夢遊病者の様になり付近を歩き廻る。他人の死体を見ても視線で追うだけで、人間としての神経さえなく、ただ感覚だけで生きているのでしょ。人間としての神経はなかったのでしょ。何処をどう歩いて来たのか解らないまま夕方浜の町の寮にたどり着いた。「ただいま！」の声も出なかった。玄関に茫然と立っていると寮監が出てきて、「川内さんじゃな

いですか！」と言ったので、首を二度程振ってその場で横になった。

8月13日10時頃、寮監が「河内さん体調如何ですか？良かったら食事を！」と言って来ましたので、起きて食事をするのは何日ぶりかしらん？満足に食事をしてなかったので其の味噌汁の美味しかったのを今でも忘れない。食事を終わり一人で会社へ出かけました。無意識に歩いた。長崎駅を過ぎた頃急に臭気が鼻を突くようになった中を歩き、稲佐橋の近くになると何日も焼け続けた道端などの灰の上には、たくさんの白骨が散らばり足の踏み場もない所もありました。橋の近くに来ると橋の欄干にもたれて赤ちゃんを抱いて死んでいらした女の人の姿は今でも忘れる事ができません。その女の方は首から上がらないのです。それでもしっかりと赤ちゃんを抱いておられるのです。其の姿を見たときは何とも言えない気持ちになり、涙が次々こぼれ両手を合わせて、しばらく歩いた。すると、会社の事務所に着いた。そこには課長と係長がいました「課長！係長！」と声を掛けたら驚きビックリして茫然と立ちしばらくして、課長が「川内君じゃないか！」「はい、そうです！」と答えると、「よかった、よかった」と言ってしっかりと手を握り肩叩いて涙を流して喜んでくれた。「10日昼頃お前が横たわっている姿を見た時は、係長と川内！駄目じゃないか？と話をしていたのだ。とにかく良かった。これで一人ふえた。」「生き残りがクヨクヨしてもしょうがないお茶でも飲みますか」と言ったら係長が「よし俺が用意する」と言ってお茶を持ってきたので、乾パンを袋から出し「さあ！食べてください。」と言ったら課長が一枚食べて「おおっ！これや美味しい何時も俺達が食べている乾パンと違う色から違うお前こんなの何処で仕入れた？」「何処でもいいじゃないないですか、食べてください」と言いながら、色々話をしている内「課長が食べているのは海軍下士官の非常食の非常用乾パンです。」と説明すると、「解った！解った！お前これからどうする」と言った。「僕の一番大切な兄さんを探しにいきます」と、言ったら「兄さんを探すより大切な人に逢いに行った方が早いぞ」と言われた。「まあ気のすむ迄捜してこいよ捜して解らなかつたら事務所に帰ってくる事」1時間ほどして事務所に帰ると

「お前これからどうする」「1日寮にて休養して15日実家に帰る予定にしています。」と報告、「お父さんも心配しているだろうから、15日必ず途

中道草喰わず真直ぐに帰る事、わかったね。」と、言って握手して別れ自分は寮に歩いて帰りました。

夜明けて14日は、一日ゆっくり休養、15日朝寮を出発自宅に向かった。道の尾駅まで歩き佐世保行きに乗車途中諫早駅、大村駅、川棚にて重傷者の乗降が多数あり列車が2時間以上遅れて佐世保駅に到着、それから鹿町行きのバスに乗るため西肥バス本社駅前停留所に行くと「本日の鹿町行きバスは、もうありません。」明朝8時発が始発との事で、一夜を明かす所を何処にするかベンチに腰掛け思案していると、数分してから会社の幹部らし人が来て、私の姿を見て「どうしました。」と尋ねられたので、罹災証明書を見せたら「会社の仮眠室が空いていますから、一晚ゆっくり休んで明朝8時の始発で帰って下さい。」と部屋に案内された。しばらくすると女の人が、「失礼します。」とドアを開けて「夕食を持って来ました。」と言った時はビックリしました。その晩は、ゆっくり休みました。翌朝8時今では考えられない木炭バスに乗り出発し、バスにゆられ一時間位してある坂道に来たらバスが動かなくなった。車掌さんが「誠に恐れ入りますが降車して坂の上まで歩いて下さい。」2~3分歩いて又、バスに乗り一時間位、やっと鹿町に到着したのが11時ごろ、それから歩いて20分やっと自宅に帰り着く。玄関をガラッと開けしばらく立っていると、隣のお婆さんが出てきて「龍ちゃんか？」と尋ねたので、首を縦に振ってうなずくと「よく帰ってきた」と二度ほど言った。「帰って来たよ！」と叫ぶと5・6人どっと出てきて、「よかった！よかった！これで安心！」と喜んでいた。「ここは人が多いからお婆さんの家に行って身体を洗い身に着けていた物をすべて着替えて今夜は、お婆さんの家でゆっくり寝たら！」と言われて床に着く。風呂に入り数日間のほこりを落とした時の気持ちのよかった事を今でも忘れない。

夜が明け自分の家に帰り朝食を済ませ又寝る。夕方より腹の調子がおかしくなり、左手の肘から下が紫色になり少し変に痛む。18日、19日2日間自宅静養18日に院長先生が朝、出勤の際に自宅によって「左腕、どうですか？どれどれ診てみるか。」と左腕を取って、「ああ、これ段々悪くなっている。今日あたり入院し手術しなければ！」と言われ「入院の時は病院から車を廻しますから。」と言って出勤された後に坑内事故あり入院、手術者が出て

18日は、帰りが遅くなり立ち寄ることが出来ないので、19日朝出勤の際立ち寄るからと電話あり、午後から下痢がひどくなり、頭髪が抜け出した。下痢が止まらず便所に入ったままにしていたら、父親が来て「お前大丈夫か？」と言ったので「大丈夫、出たり入ったりするのが面倒だから暫く入っている。」一晩中眠る事が出来ず一夜を明かす。19日朝院長先生立ち寄られ「即時入院、手術する。すぐ川内さんの所に車を廻して手術の用意して！」と電話をかけた。そして車が来て入院となった。一時間位経過して手術室のベットに寝かされ、まな板の上の鯉と同じ、手術開始。一箇所13cm位切開、三箇所3cmほど切開する。院長先生が「もうこれは駄目だ！」と言った。「何が駄目ですか？」と尋ねると2本の骨の1本が骨折3cm程肉に刺さっており殆ど肉が腐敗溶けているとの事、肉を全部出し刺さっている骨を4cm程切断取り出す。「都合によっては左腕切断になるかも知れないその覚悟だけはして下さい。」と左肘切断の時はずいぶん首も切断して下さいと言ったら「それは出来ないよ。それは冗談にして2~3日は状態を見ましょう。」一時間ちょっとで手術は終わり部屋に帰りベットに仰向けに寝かされ左腕は、高い枕に持たせ三ヶ月間の闘病生活に入る。手術後10日間程は何も解らない。ただ毎日ガーゼ取替えの時の痛さ、これだけは今でも覚えている。12日13日経過した頃から下痢も収まり頭髪の抜けもなくなったので、看護婦さんに「抜けなくなった。」と言ったら笑っているので、「何が可笑しい？」と聞いたら「川内さん鏡見る？」「見るよ」と言ったら自分の鏡を出して「ホラッ！」と言って顔を写した。殆ど抜けて。毛髪がない「これでは抜けるはずないなあ！」と二人で笑った。この頃より食欲も出て気分もよくなった。冗談も言えるようになり、夜も良く眠るようになった。一ヶ月も無事なんとかすこしガーゼ取替え診察室まで杖をついて歩いて行けるようになった。診察室に入っていくと「潮音院の若いお坊さんがお見えになりました。」と何時も言われた。」と何時も言われた。腕の方もだいぶ肉が盛り上がって来た。「もう大丈夫、後は傷口が塞がるのを待つだけそしたら退院ですわ。」と院長先生に言われホッとしました。

院長先生、看護婦さん小学校時代の多くの友に助けられ12月10日午後退院する。午前中院長先生に呼ばれ「川内さん3ヶ月半本当に辛かったですし

